北波多無形民俗文化財

# 徳須恵祇園祭

七月下旬の土曜日・日曜日に
山笠が威勢のいい山ばやしにのり、
町なかを練り歩く。

◈ 二七〇年近い歴史と
伝統を後世に。

## 山笠巡行 MAP

●祭り正式名称
徳須恵祇園祭

●開催場所
佐賀県唐津市北波多徳須恵 八坂神社

●開催日程
毎年７月下旬の土曜日・日曜日

●アクセス
車の場合：唐津駅より２０２号線（伊万里、佐世保方向）をまっすぐ、
信号「北波多中学校前」の先
電車の場合：ＪＲ唐津駅または、ＪＲ山本駅（ＪＲ伊万里行き）下車、その後バスに乗り換え。
バスの場合：唐津から伊万里方面（徳須恵バス停下車）徒歩で２分。

●取材協力・写真提供元
徳須恵祇園山笠保存会　市木武夫、石堂光夫

●作成日　平成２８年１月

お問い合せ
地域文化伝承事業　徳須恵山笠振興事業
徳須恵祇園山笠保存会

保存会会長 市木 武夫
TEL 0955-64-2131

徳須恵区長 石堂 光夫
TEL 0955-64-2415

# 徳須恵祇園祭の歴史を紐解く。

## 祇園祭の起源

祇園祭のはじまりは、今からおよそ一一〇〇年前、清和天皇の時代八六九（貞観一一年）。当時、京の町で疫病が流行し大勢の死者が出る悲惨な状況だった。猛威を振るったこの病を人々は神仏に祈願することで収めようとした。この祈祷により疫病退散を祈った「祇園御霊会」が祇園祭の起源だと言われてる。明治時代には「神仏分離令」により、それまで「祇園社」と呼ばれていたものが「八坂神社」となった。

**山を曳いてる姿**

大人山笠は子ども山笠と比べると大きく、鮮やかな飾りが人目を惹くほど豪華絢爛な仕上がりに。曳き子たちの表情にも注目！

## 祇園祭と山囃子

太鼓・鐘の賑やかな囃子を奏でる。

### 祇園祭のお囃子

徳須恵祇園祭の祇園囃子は六種類ほどある。笛を主体に太鼓、締太鼓、鐘、三味線が用いられ、囃される。山を最初に引き出す時には「さらし」を囃し、道行では「せり」となり、止まっている時は「松ばやし」「一張立て山」「トトロコ」「フーエ節」などが囃される。余談だが、お囃子で使っている篠笛は今でも全て手製で、素材となるミズクリ竹を伐り出し、毎年数本制作されている。

## 年表

徳須恵祇園祭の経緯を辿る

| | |
|---|---|
| 宝暦二年　一七五二 | 祇園祭の始まりとされています石炭景気にわいた戦前は、二台の山笠で賑わいました |
| 昭和四〇年　一九六五 | 道路事情、炭鉱の閉山若者の流出等の理由により山笠行事の廃止 |
| 昭和五四年　一九七九 | 山ばやし保存会を結成 |
| 昭和五五年　一九八〇 | 神輿二基を完成させ、区内巡りを行いました |
| 昭和五六年　一九八一 | 人形や屋形をトラックに飾り、トラックを曳き巡行 |
| 昭和五七年　一九八二 | 台車に飾り付け、一七年ぶりに祇園山笠を復活し巡行 |
| 平成一六年　二〇〇四 | 当時の山笠の高さは約五m六〇cm |
| 平成二六年　二〇一四 | 山笠台車を新築<br>子供山笠を作成<br>子どもたちに短距離を曳かせ、巡行 |

昭和３８年頃

昭和初期頃

## 徳須恵祇園祭の始まりと背景に垣間見る。

徳須恵祇園祭は宝暦二年（第九代将軍徳川家重一七五二年）より始まったとされている。このことは長い間分かっていなかったのだが、太鼓の張り替えを行なった際、太鼓に表記されている年代を発見し、祭の起源を知る事となったのだそうだ。祇園祭の奉納先である徳須恵天満神社内の八坂神社は京都の八坂神社の分岐とされており、当時全国に蔓延していた疫病の退散と健康祈願の思いから夏に山笠を曳く祇園祭が行われたのが始まりだと云われている。戦前は山笠が二台あり、近隣の相知や厳木にもある山笠の文化と影響しあいながら今日まで伝承されてきた。昭和四〇年、炭鉱の閉山や若者の流出により、一時祇園祭を中止せざるを得ない状況と化してしまったのだが、昭和五七年、一七年ぶりに復活し、健康と子供達の成長祈願の意味を込めて毎年開催され、北波多地区を賑わせている。

### 開催日

昔は旧暦の六月一五日に開催されていた。しかし現代では子ども達が主体なため、夏休みに入った七月の下旬に二日間開催されるようになったのだ。

### 北波多地区の炭鉱時代

祇園祭は炭鉱産業の歴史と大いに関係していると言える。北波多地区の炭鉱が景気に沸いた時代、祇園祭の山笠は二台あった。当時の徳須恵地区には今では想像できないほどたくさんの夜店が立ち並び、近郷近在からの参詣人や見物人が多数訪れ、道の行き来が困難を極めるほどの賑わいを見せていたそうだ。

現在は一台の山笠が町を練り歩いている。また、平成二六年からは子ども達にも楽しんでもらおうと子供山笠も作成され、お囃子の音と共に賑やかに町中を練り歩いている。

## 山笠復活

地域住民の協力により再起

# 祇園祭の復興に。

炭鉱景気に沸いた戦前は徳須恵最大の祭行事で二台の豪勢な山笠が賑わいのある町中を練り歩いていた。

しかし、時代の流れと共に炭鉱が次々と閉鎖し、ついには昭和四〇年（一九六五）に祭を辞める事となったのだ。

だが、それから一四年後の昭和五四年（一九七九）、徳須恵祇園祭を復興させようと村井一男さんが世話役となり一八人が協力し、徳須恵祇園囃子保存会が結成された。そして週に二回徳須恵地区の子ども達を集めて祇園囃子の練習を開始。更にはPTAや消防団などへ働きかけるなど祇園祭の復活運動が行われたのだ。

そしてついに、辞める事となった昭和四〇年（一九六五）から一七年後の昭和五七年（一九八二）に復活を遂げたのだった。

# 今も色濃く受け継がれる復活秘話。

復活を遂げた時、山笠は炭鉱全盛期と比べると小さくはあったのだが、約百数十人の大人や子どもが駆けつけ、山笠を曳いたり、お囃子を奏でたり、家の外に出て懐かしそうに眺めたりと地区全体が大喜びしたのだそうだ。

# もう一つの中止と復活の理由。

地元民しか知らない話として残されているもう一つの中止の理由が実はある。

祭好きの男たちは酒に目が無く、仕事にならないほど酒を浴びていた。その事に困った当時の権力者は祭を辞めさせ、徳須恵祇園祭の歴史に終止符を打とうとしたのだ。しかし男たちはそれでは困ると大酒飲みを辞めることを誓い、長い年月の間協議を行なった末、祭りは復活する事となったのだそうだ。

そのため、徳須恵の男たちの中では酒は飲んでも飲まれるなと伝えられている。

# 祭りに情熱を注いできたものたちが歴史を映し出す。

徳須恵祇園祭の山笠は高さがおおよそ六mで重さが三トンある大型の山笠だ。徳須恵祇園山笠保存会が保存管理している山車一台を組み立て、山笠の表側である表山（おもてやま）と裏側である裏山（うらやま）に毎年それぞれ表題を決めて作り上げ祇園祭を迎える。主に歴史上の人物や起こった戦い、伝説などを表題にする事が多く、これらが山笠に飾られた時にはとても勇壮な姿へと変わる。また、辺りが暗くなると山笠はライトアップされ明るい時とはまた違った幻想的な姿を拝むことが出来きる。

**まさに圧巻の山笠**
夜にはライトアップされた幻想的な姿を拝むことができ、祇園祭の見所の１つともなっている。

## 山笠

掛け声とともに駆け抜ける。

## 国道を走る山笠

祇園祭では、徳須恵の中心を走っている国道二〇二号線を山笠が一気に駆け抜ける。その巡行距離は特に長いと言われており、町の中心を山笠が祇園囃子の音色と「えんやー」の掛け声とともに駆け抜ける姿はまさに圧巻で迫力満載な光景を目にすることが出来る。

**山笠を彩る独自の飾りつけ**
徳須恵祇園祭の飾りつけは毎年自分たちでテーマを決めそれに沿った飾りつけを行っている。独自に決められた飾りは他とは違った趣をだしており実に味わい深いものとなっている。

# ギャラリーの歓声が何よりの宝。

## 担い手の声（喜びや苦労）

山笠の醍醐味、それは「曳手・囃子手・ギャラリー・実行委員会等すべての参加者が一体となりひとつの物語を作り上げること」である。その主役には山笠保存会が構えており見上げる視線や盛大な歓声、黄色い声援が彼等の活力となっている。彼等のテンションが最高潮に達した時、徳須恵祇園祭の山笠は最高のパフォーマンスを発揮する。また、喜びだけではなく無事故への配慮もかかせない。祇園祭で一番怖いのは事故が起きる事である。山笠には高さのある飾りや鉄製の車輪など、常に危険と隣り合わせで運営されている。事故から学ぶ事は多く常に安全確認に力を入れている。それでも、ごくまれに軽いけがをする者がいるため祇園祭が終わるまでは安心が出来ない。せっかくの楽しい祭もけが人がでては台無しとなるため開始前の神事では安全祈願が欠かせない。

# 歴史と伝統を後世へ。

## 子供山笠

# お囃子の音と共に賑やかに町中を練り歩く。

**山笠を組み立ている様子**
山笠作りが始まると、消防団員らが協力し飾り付ける。

## 子供山笠

徳須恵地区は少子化により昔と比べると子どもの数が減少しており、祇園祭への参加者が少なくなっている。祭を続けて行くためにも徳須恵だけのお祭りとせず、北波多全体のお祭りにしようと様々な取り組みを行っている。その一環として平成二六年に子どもだけの山笠「子供山笠」が作成された。今では毎年北波多の幼稚園・保育園の子ども達がお囃子の音と共に山笠を曳き、祇園祭を楽しんでいる。祇園山笠があることにより子どもたちにも地域の話題や連帯意識の中から協力の心が生まれ団結力ができる。祇園祭はよい仲間づくりの場としても良い成果と期待が込められているのだ。



# 私たちと一緒に北波多地区の徳須恵祇園祭を盛り上げませんか。

## 徳須恵祇園祭の現状

徳須恵祇園祭は、主に徳須恵祇園山笠保存会によって支えられている。主に過去に祭りを体験した人、今祭に大きく携わっている人が中心となり結成されており、祭に大きな情熱を注いでいる。その背中を見て育った子ども達には祭を通じてさまざまな事を学び未来の担い手へと成長し後継者になって欲しいと願っているが、そこで深刻になっている問題が少子化による子どもの減少だ。現在日本は子どもの数が激減する傾向に走っているが、徳須恵もその傾向が目立つ状況となってる。昔は数百人の参加者で賑わっていた祭りも今では曳き手が少なくなっており一番頭を悩ませている。

## 保存会の活動内容

後継者を増やすため北波多の保育園と幼稚園の協力のもと、子供山笠を曳いて祇園祭の楽しさを伝える取り組みを行なっている。さらには祇園祭の中で演奏しているお囃子をもっと北波多全土に広め、親しみを持って頂くために北波多文化連盟祭りや地区敬老会・恒例の春まつりなどで披露している。これらの取り組みにより徳須恵以外の地区との交流を深めてより強い地域の輪を作り、ゆくゆくは徳須恵祇園祭が交流の場となって参加者が増えていくようにして行きたい。また、観光客の飛び入り参加や興味のある人には法被の貸出しを行ない法被を着て参加して頂いたり、法被を着ずとも私服のままで参加して頂いたりと、気軽にいつでも参加できる祭にしていきたい。

# 山笠保存会会員募集！

祇園祭を支えている山笠保存会は祇園祭の大切な伝統と文化を守り、継承するため会員の募集を行なっています。現在、他の地区からも数名入っておられます。山を曳いてみたい方、お囃子を囃したい方、山笠づくりに興味のある方など徳須恵祇園祭にたずさわってみたい方は、ぜひ会に入ってみませんか？

地域文化伝承事業 徳須恵山笠振興事業
徳須恵祇園山笠保存会
代表 市木 武夫 ☎0955-64-2131